# 「神との平和」

（ローマ５：１～１１）

2018.2.25

今日私は福島へ行く予定でしたが、先週家内が体調を崩して、福島教会には一週ずらしていただきました。以前もこのようなことがありましたが、家内の説教を楽しみしてくださった多くの皆さん、申し訳ございません。来週は大丈夫だと思いますので楽しみにしていただきたいと思います。

アシジの聖フランシスコによる有名な「平和の祈り」という詩があります。その前半部分だけ紹介いたしますと、

「神よ、わたしをあなたの平和のための道具にしてください。

憎しみのあるところに愛を争いのあるところに和解を

分裂のあるところに一致を疑いのあるところに真実を

絶望のあるところに希望を悲しみのあるところに喜びを

暗闇のあるところに光をもたらすことができますように。」

最初の「平和のための道具にしてください」という言葉がとても印象的であります。

これは、主イエスが語られた山上の説教のあの有名な言葉を思い起こさせます。**「平和をつくり出す人たちは、さいわいである、彼らは神の子と呼ばれるであろう」**（マタイ５：９）。私たちは誰でも、平和を愛し、平和を願っていることでしょう。ただ主イエスは、「平和を愛する人」と言うのではなく、「平和を造り出す人」と言われました。世の中には、平和を造り出すどころか、逆に争いばかりを生み出す、トラブルメーカーと呼ばれるような人がいます。しかし、私たちはそうではなく、ピースメーカーになるように、平和を造り出す人になるようにと神さまは願っておられます。

この山上の説教における主イエスの言葉は、直接的には、**「みもとに近寄ってきた」**という弟子たちに対して語られた言葉です。すなわち、あの山上の説教は、一般の人々に語られた言葉ではなく、神を信じる者たちに対して、キリスト者としての生き方を語ったものと言われます。神を信じている者たちは、このような生き方が期待されている。いや、神の恵みによって、あなたがたはこのように生きることができる！と語られています。

その理由は、神を信じる者たちは、人間にとって最も大事な、神との間に平和が与えられている者たちだからということです。この世にあって、**「平和をつくり出す人」**となるためには、まず自らが神との間に平和が与えられている、ということが重要であります。すでに神との間に平和が与えられている人こそ、平和を造り出す人になることができる。平和のための道具として生きることができるようになるということです。

それで、今日お読みしている５章の初めは、**「このように、わたしたちは、信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストにより、神に対して平和を得ている」**（１）とあります。**「このように」**とありますのは、その前の４章までのところで語ってきたことを受けて、次のステージに進もうとしてい

る言葉であります。４章までで語ってきたことは、「**わたしたちは、信仰によって義とされた**」（1）ということでした。その４章までの、信仰によって義とされるかどうか？という議論を終えて、それはもう確かなこととした上で、それによりどのような恵みが与えられているかをここで語り始めます。

「**義と認められた**」ということはどういうことか、それが「**神に対して平和を得ている**」（1）ということ。新共同訳聖書では「**神との間に平和を得ており**」と訳されています。「平和を与えられるであろう」というのではなく、今すでに平和を得ている、という。

この平和というのは、私たち信仰者が心に感じる平安というものとはちょっと違います。もちろん、私たちは罪から救われたというとき、それまでにはない平安を感じることがあるでしょう。けれども、ここでは、そのような私たちの思い、主観的な感情のことを言っているのではなく、客観的な、神との正しい関係が築かれていることを意味しています。神さまと私たち人間との間に平和の関係が築かれている。

聖書が語るこの「**平和**」というのは、ただ単に「争いがない、戦争が終わった」という意味ではありません。たとえば、お隣の朝鮮半島では、１９５０年に朝鮮戦争が起こり、１９５３年に休戦に至ったものの、終戦ではなく、あくまで休戦状態ということです。名目上は今も戦争状態にあるそうで、戦闘が一時休止しているに過ぎない。両国の間には、いまだに平和条約が結ばれておりません。

ここで「**平和**」と訳されているギリシャ語の言葉は、もともとはヘブル語の「シャローム」という言葉が持っている意味、内容を受け継いでいる言葉です。ヘブル語のシャロームというのは、イスラエルでは日常の挨拶の言葉として、「こんにちは」という思いで「シャローム」と言います。この言葉は、争いがないというだけでなく、完全に良い状態、満ち足りて溢れていること、繁栄していることなどを表す言葉です。たとえば、水がコップに一杯に入っている。そこに、さらに水を入れようとすると、コップから水があふれる－その状態を「シャローム」と言うそうです。「神に対して平和を得ている」というのは、そのように、神との満ち足りた関係、神との間に完全に良好な関係が築かれている、ということ。パウロはここで、それほど大きな恵みが私たちには与えられているのだ、と５章を語り始めます。

ここで、「平和を得た」言うからには、それ以前は平和ではなかった、神との間に不和があった、敵対関係にあったことを前提にしています。それで10節には、「**もし、わたしたちが敵であった時でさえ**」とあります。神に義と認められる以前は、私たちは神の敵であった。また９節では、「**神の怒りから救われる**」とありますように、救われる以前の人間は、神の怒りを受けるべき存在であった、という。

このように、聖書においては、そのように「罪」とは神に敵対して生きることです。ところが多くの場合、私たちは自分がまさか神に敵対しているなどとは思ってもいない。自分が神さまと不和の状態にあること、神の敵となっていることに気づいていないでいます。

ただこれは驚くべきことではないかもしれません。この手紙を書いている使徒パウロでさえ、救われる以前、自分がまさか神に敵対しているとは思ってもいませんでした。パリサイ人

として、神さまから与えられた律法を厳格に守り、自分は罪のない人間だと自覚し、自認していた。その熱心さから、クリスチャンを迫害し、しかもその先頭に立っていたところが、クリスチャンを捕まえに行くためにエルサレムからダマスコへ向かっていたとき、突然天から強い光がさし、倒れ込んだパウロに天から声がかかりました。**「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」**（使徒９：４）。**「主よ、あなたはどなたですか」**と尋ねるパウロに対して、**「わたしは、あなたが迫害しているイエスである」**と語りかけられた。この出来事は、パウロにとっては衝撃的な出来事でした。神の前に清く正しく生きていることを誇りとし、自分は神の味方として、神さまのためにキリスト教を熱心に迫害していると思っていた。ところが本当は、自分は神に向かって刃を向け、神の敵となっていたと知らされた。10節の**「もし、わたしたちが敵であった時でさえ」**とは、パウロ自身のことであります。

私たち日本人の場合、それ以上に、神に敵対しているという自分のことが分からないかもしれません。いつもお話しますように、私たちは罪というものをどうしても倫理・道徳のレベルで捉えてしまうところがある。倫理や道徳における罪というものは、「人はこうあるべきである」という掟や基準、決まり、人としての道に照らして、それを守っているかどうかが良し悪しの判断基準となります。

けれども、聖書が一貫して語っている罪は、神さまとの関係における罪です。なぜそれほどまでに、神との関係が問題とされるかといいますと、そもそも全ての人は神によって創造され、神によって命が与えられ、神によって生かされている存在だからです。そればかりか、人間だけが神のかたちに創造されたとあります。それは、私たち人間は神さまのことが分かる存在として、この私を生かしていてくださる方がおられる、そのことがわかる者として造られ、だからこそその造り主なる神を仰ぎ、神に目を注ぎ、神との人格的な関わりの中で生きるようにと造られた。ところが人は、その造り主なる神との生命的、人格的な関わりから離れて生きるようになってしまった―それが聖書が語る罪です。そのような人間の罪をよく表しているのが、主イエスが語られたあの放蕩息子のたとえ話です。あのたとえ話では、弟息子が放蕩生活をしたことが問題ではなく、あの息子が父との関係を断ち切って、父のもとから離れて行った。それが何よりものあのたとえ話での問題。罪というのはそういうことです。

私たちに命を与え、愛していてくださる神さまを神として崇めず、敬わず、神などいないかのように、心から閉め出して生きる。あの放蕩息子がそうであったように、父なる神さまから離れて生きるほうが、私たちにとってよっぽど自由に延び延びと生きることができると思ってしまう。けれども実際には、人は造り主なる神さまから離れて生きるとき、必ずその代わりになるものを見つけて生きるようになる。自分にとって頼りになるものを見い出して、それを頼みとして人生を生きるようになる。神ならぬものを、被造物にすぎないものを、人間が生み出したにものを神のようにして生きる。これが聖書が語る人間の姿であります。それが、神に敵対する姿だと聖書は語る。

そのように、神に敵対している者たちが、どのようにして平和を得ることができるのか？

このパウロの論争相手であったユダヤ主義者たちは、律法を守り行うことをとおして、神さまとの間に平和の関係を築くことができると考えた。言うならば、自分たちが真面目に生きることによって、自分たちが神さまのところまで歩み寄っていく。神の怒りを和らげることができる、神との平和を勝ちとることができる、と言った。

けれどもパウロは、「**神に対して平和を得ている**」（1）と言っても、自分たちの頑張りで平和を勝ちとった、というのではないと言う。2節では、「**いま立っているこの恵みに信仰によって導き入れられ**」とあります。神さまに導かれて、この恵みの中に入ることが許された、という。

その平和は、自分の力によって勝ち取ったのではない。1節にありますように、「**わたしたちの主イエス・キリストにより**」、2節でも「**彼により**」と重ねて述べています。救い主キリストによって、この神との平和が与えられたのだ。「**平和**」と訳されているギリシャ語「エイレイネー」という言葉は、「二つのものを一つに結び合わせる」という意味があるそうです。神と敵対している人間のために、御子キリストが父なる神と人間との間に立って、両者を結び合わせてくださった。

そのことを今日読んでいる後半のほう、10節、11節では「**和解**」という言葉で同じことを表現しています。「**神との和解を受けた**」（10）といいます。新共同訳と新改訳2017は同じ訳し方をしていて、「**神と和解させていただいた**」と言います。これらの訳で言い表そうとしていることは、神と人間と、敵対していた両者がお互いに歩み寄って、それによって和解が成立した、というのではないということです。神さまと和解するために、平和を得るために、こちら側、私たち人間の側にできることはない。神さまの側の一方的な歩み寄りによって、和解させていただくしかない。

パウロがココで語ろうとしていますことは、神との平和を得るために、神と和解させていただくために、私たちが何をなすべきなのか、ということではありません。そうではなく、和解のために、神が何をしてくださったのか、御子キリストが何をしてくださったのか、そのことだけをパウロは語ります。1節で、「**わたしたちの主イエス・キリストにより、神に対して平和を得ている**」と語ったパウロは、8節では「**わたしたちのためにキリストが死んで下さった**」と述べ、9節では「**キリストの血によって**」と述べます。私たちの救いのために、私たちの罪の身代わりとして、キリストが十字架で血を流し、死んでくださった。神との平和は、キリストの十字架の死によってもたらされた！　かつて、弟子たちを前にして、「**平和をつくり出す人たちは、さいわいである、彼らは神の子と呼ばれるであろう**」と語られた神の子イエスが、自ら平和を造り出す人となってくださいました。平和のための道具として、自らの命を差し出してくださった。それによって、敵対していた神と人間とを一つに結び合わせてくださった。

ただ、間違ってはいけないのは、先ほども言いましたように、主イエスが神と私たちとの間に立って和解をもたらしてくださった、というとき、主イエスの仲立ちによってお互いに歩み寄った、というのでは決してないということです。主イエスは、執り成しをしながら、お互いに歩み寄るようにと双方に呼びかけた、という

のでは決してない。あの中東のイスラエルとその周辺諸国による中東和平の問題は、いつも途中で頓挫してしまいます。いろんな国が間に立って、仲介役をして、両者がそれぞれ譲歩し、和解へと歩み寄ろうと交渉をいたします。この場合、どちらか一方だけが譲歩するのではなく、双方が互いに歩み寄ることがどうしても必要です。しかし、双方が自分たちの権利ばかりを主張するため、それがなかなか上手く行かない。私たちの罪の赦しについて、神さまが人間と和解をなさるというとき、父なる神さまは、決して和解を受ける立場ではないということです。ともしますと、私たちは、神さまは非常に気むずかしい方で、それが御子キリストが間に立って十字架にかかってくださったことによって、その気むずかしい神さまが怒りを静め、しぶしぶ和解に応じてくださったかのように思ってしまうかもしれません。しかし、聖書をちゃんと読むと、決してそんなことはありません。なぜなら、御子キリストをこの世に遣わし、十字架につけられたのは父なる神だからです。御子イエスがなされたすべてのことは、父なる神さまの御心によるものです。父なる神が、ご自分の独り子をこの世に遣わしてくださって、敵である私たちに向かって、ご自分と和解するようにと、救いの手を差し伸べてくださった。和解のために、何一つできない私たちのために、神さまのほうが一方的に犠牲を払い、御子を十字架につけた上で、「和解を受けなさい」と呼びかけ続けてくださった。「御子イエスが十字架にかかり、あなたがたに代わって死んだゆえに、あなたがたの罪は赦された」と神さまが喜びの知らせを告げてくださる。一方的な神の働きかけであり、一方的な恵みです。

ですから、私たちにできることは、パウロがずっと語ってきたこと、差し出されている和解の恵みを受け取るだけです。新改訳2017では、10節のところをこう訳します。**「敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させていただいた」**。私たちが何かをしたからではなく、敵であることをやめたからでもなく、御子イエスが十字架で死んでくださったことによって、神と和解させていただいた。神の側からの一方的な働きかけによって、和解を受けさせていただいた。その差し出されている恵みを受け取るという行為が、**「信仰によって」**ということです。「ありがとうございます」と感謝をもって受け取る、それが信仰であり、それしか私たちにはできない。

パウロはローマ教会の人々に、「御子キリストの十字架によって、私たちはすでに神との間に平和を与えられているのだ」と語ります。この1節は、ギリシャ語の写本上に少し問題があって、有力なギリシャ語の写本では内容が少し異なっていて、それによるとこう訳しています、**「神との平和を持ち続けようではないか」**。そのため、日本語の詳訳聖書と呼ばれるものでは、**「神との平和を持っているという事実をしっかり握っていましょう」**と訳します。これは、パウロの意図していることをよく汲み取った、良い訳だと思います。**「神との平和を持っているという事実をしっかり握っていましょう」**。

こう語るのは、私たちキリスト者が、すでに平和が与えられているという恵みを見失い、握っているはずの事実を手放してしまうことがあるからでしょう。救いを得たはずなのに、いまだに敵対関係にあるかのように、不和の状態にあるかのように思ってしまうことがある。な

ぜそうなってしまうのでしょうか？　それは、和解のカギが、平和を与えられるカギが自分の側にある、自分の側にあると、いまだに思うときではないでしょうか。キリストによってではなく、やはり自分の正しい行いが、キリスト者としてどう生きているかがカギで平和の関係が築かれるとどこかで思い込んでいる。ところが、その自分を顧みると、「平和が与えられた」と言い切るには、まだまだ不足がある、足りない状態にある、と思ってしまう。けれどもそれは、パウロがずっと戦ってきた、自らの行いによって義を得ようとする、平和を得ようとする態度であります。

たとえ私たちには不足があっても、御子キリストがなしてくださったわざに果たして不足があるでしょうか？　私たちが神に義と認められ、神との間に平和が与えられたのは、私たちがそれだけの良い生き方をしたからとか、ちゃんと悔い改めたからでもない。御子キリストが十字架にかかって死んでくださったからこそ、敵対していた神との間に平和が与えられた。頼るべきは、どこまでいっても十字架のキリストのみです。

だからこそパウロは、「**キリストによって、今や私たちに神との平和が与えられている**」と喜びの知らせを告げます。この事実を見失わないで、しっかり握っていましょう、と勧める。神との間に平和が与えられている。そのことを私はどこで実感するかなあと思ったときに、このあと8章に出てきますが、祈るときに「**アバ、父よ**」（8：15）と呼びかけることができる。神さまに向かって、「**アバ、父よ**」と、「神さま」と呼べる。最後に「主イエス・キリストのお名前によって祈ります」と祈りますが、イエス・キリストが間に立ってくださったがゆえに、神さまに向かって「**父よ**」と呼べる。これが、平和が与えられている者たちの姿ではないでしょうか。「ああ、神を『神よ、父よ』と呼べるんだ！」ということです。この1節の聖句を、今朝、私たちの信仰告白としたいと思います。この1節には、「私の真面目さにより」でなく、あるいは「ふさわしい信仰生活を送っていることにより」でもなく、「**わたしたちの主イエス・キリストにより**」とあるからこそ、私たちもこれを自らの言葉として、喜びの告白として言うことができます。「**このように、わたしたちは、信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストにより、神に対して平和を得ている**」（1）。

お祈りをいたします。

天の父なる神さま、あなたの御名を讃えます。今日もあなたに招かれて御前に集ってまいりました。資格のない者たちが、御子キリストが間に立ってくださった、そのことのゆえに、あなたを「わが神」と仰ぎ、「わが父」と仰いでひれ伏すことができます幸いをありがとうございます。神との平和が与えられている、この事実から離れることがありませんように、私たちを恵みの中に留め続けてくださることをお願いいたします。

病気や弱さを覚えて今日来ることができないでいる方々、あなたが顧み、癒やし、力を与え、次の週この礼拝の場へとお返しくださることをお願いいたします。

私たちの教会では会堂建築をと願い、土地探しを続けています。1つ1つの事柄の中に、あなたの見えざる手が働いて、導きを与え続けてくださいますことをお願いいたします。

東北教区の五つの教会の上に、弘前、三沢、築館、仙台、福島、それぞれ立てられている教会、また先生方を祝福しお用いください。また私たちの教会の献身者であります千葉和幸先生とご家族の上に、遣わされております岬教会の上に、変わらぬ豊かな主の、恵みがありますように、心からお願いをいたします。

主イエス・キリストのお名前によってお祈りをいたします。アーメン

（仙台南光沢教会牧師佐藤信人）